



# 巨人、大鵬、玉子焼き

## 第四十八代横綱大鵬を偲ぶ

元横綱大鵬（享年72歳）が旅立ちました。

本名は納谷幸喜、15歳で二所ノ関部屋に入門。21歳で横綱となり、柏戸と共に「柏鵬時代」を築いた大横綱です。

日本が高度経済成長期の1960年代、大鵬は61年に横綱に昇進し、63年と67年には6場所連続優勝を達成するなど、全盛期を迎えていました。

一方、プロ野球では長嶋、王のいる巨人が、65年から9年連続日本一となり、右肩がりの経済の中で国民は、時代を象徴するような強い存在に熱狂し、「巨人、大鵬、玉子焼き」の言葉が流行していました。

その横綱大鵬が、電気も水道も、食べるものさえなかった暮らしの中で、子どもを守り抜いた亡き母親のことをしみじみ語ったことがあります。

「…寒い冬の北海道。布団

は1枚しかありませんでした。私たち兄弟3人はその布団に足を突っ込んで眠っていました。

母は明け方まで裁縫をし、寝ていない時もありました。

自分のことよりもわが子のことを思い、食うものも食わず、着るものも着ないで、布団に横になることも我慢し、子どもものを縫っていました。



どんなに活躍しても相撲を見に来ることはなかった母親から、序二段になったときに1枚の浴衣が送られてきたことがあります。

母が縫ってくれた浴衣は女物の洋服生地で作られてあり

ました。浴衣の内側にポケットが付けられ、中に500円札が入っていました。どんな思いで送ってくれたのだろう。私は目頭が熱くなり500円札を強く握りしめました。厳しい相撲の世界。ひもじい思いをしてはいないか。腹が減った時はこれで何か食べる。という親心が心に浸みて人知れず涙を流しました。

横綱になって母親を、家族を幸せにしてやろう。その一心で稽古に励みました。」というような内容でした。

流行語になった「巨人、大鵬、玉子焼き」を生んだ作家の堺屋太一さんは、圧倒的な強さにみんなが憧れを抱いた時代に生きた大横綱の早過ぎる死を惜しんでいました。

「国技である相撲を横綱として立派に支えてこられた大鵬は、歴史に名を残す偉大な人であり、同じ時代を生きてきただけに寂しい限りです。」

世界のホームラン王「真治」さんのお別れの言葉は、「巨人、大鵬、玉子焼き」に熱狂した世代として寂しさを感ずることでした。

指宿市長 豊留悦男